

# 自覚的自己否定的思考の育成を目指した 中学校社会科授業開発

学籍番号 (239311)

氏 名 (御福和真)

主指導教員 (倉本香)

副指導教員 (畠山久子)

## 1. 新しい能力としての批判的思考

日本の学校教育は 2003 年大きな変化に迫られた。それは OECD が実施した PISA 調査において読解力の順位が下がった「PISA ショック」により日本の教育は「ゆとり教育」からの転換を余儀なくされたためである。

このように日本の教育政策は世界と連動しており、これらを理解することは、これからの教育で育成すべき学力や能力を考える上で極めて重要だ。特に予測困難な時代を生きていくためには「何を知っているか」ではなく、「知った知識をどのように使うのか」ということを重視する「コンピテンシー」が注目されてきている。様々なコンピテンシーが提唱されるなか、批判的思考は共通して挙げられ、重要な役割を担っている。疑問をなげかける思考である批判的思考は社会的事象を扱う社会科とも関連が深い。社会科における批判的思考のあり方を探ることで、社会科の目標と照らし合わせたときに、どのような批判的思考を解釈することができるのか、つまり社会科で必要となる汎用的スキルに留まらない批判的思考はどのようなものなのかを明らかにする。

## 2. 社会科の特質

戦後社会科はアメリカで隆盛していた進歩主義教育の影響をうけ戦前日本のカリキュラムの課題点を克服すべく成立した。そこで誕生した初期社会科は Dewey の思想の影響を多分に受け、子どもの経験を重視する特徴をもった。子どもたちが、日常的な社会生活のなかで課題を発見し、調べ、問題の解決に向け、話し合い、自分がどう向き合うかを考えることを中心とする問題解決学習が中核となったのだ。

一方現在の社会科は社会的事象に関する基本的な概念の習得をまず目指し、社会認識を深めることを重要視している。しかしそれで終わるのではなく、それを比較・関連づけ現実社会の課題を追究することで、多面的に考えたり、公正に考えたりすることを目標にしている科目といえよう。

社会科の目標を初期と現行で比べたとき「社会生活を理解させ」と「社会に対する関心を高め、諸資料に基づいて多面的・多角的に考察」から今ある社会に対してよりわかることを目指していることが読み取れる。手法が変わっただけで、「社会をよりわかる」ということは誕生以来通底しているのだ。

### 3. 自覚的自己否定的思考とは何か

社会科の特徴は「社会をよりわかる」ことであり、どのようにわかったのかが問われる。「社会のことがよくわかる」には学習者が授業を通じて、自らを省み、これまで自分がみていた社会像に変化がある、変化に気づく過程があることが必要だろう。この過程においては現実社会における矛盾に対しても追究していく姿勢はかせない。このような社会・他者・自己に対して疑問を呈する過程はまさに批判的思考を通じて可能となる。社会科の目標を達成するためには批判的思考が重要な役割をもつのだ。ここに社会科と批判的思考の密接がみられる。ここから社会科の目標と照らし合わせたときに解釈される批判的思考を「自覚的自己否定的思考」と呼び、その特質を本論では明らかにする。そのために Paul の「強い意味」での批判的思考を「横の異質性」と「縦の異質性」として再解釈し、さらに社会科教育学者山田勉の「自己否定」を用いて考察する。

Paul は批判的思考を「弱い意味」と「強い意味」の2つに区別し、前者は一面的で他者や外在する対象にのみ目を向けるもので、後者は多面的で自己にそのまなざしが向かうものであると特徴づけた。自分の意見を持ちつつもそれに固執しない、そして自分の意見を柔軟に修正していける強い批判的思考をもつ市民の育成が求められると主張した。ここから私は「強い意味」の批判的思考には社会システムそのものを問うような多面的・多層的に考え、自己相対化させる「縦の異質性」という特徴があると再解釈した。しかし Paul の「強い意味」の批判的思考は自己相対化させるだけで判断の保留であり、市民社会の育成には不足している。そこで自己否定することでより深い社会認識を形成できるのではないかと考えた。

これを踏まえて社会科教育学者である山田勉の「自己否定」を参考にする。彼は自己否定によってより深い社会認識ができると考えた。それは私たちの立場性に由来する。私たちは何か社会的事実をみるときに過去の経験によって蓄積された価値観を通し、問題の解決に向けて頭を働かせる。しかしその社会的事実を精密にみていけば、自らの社会認識では理解出来ない部分や納得のいかない部分が生じ、疑念が湧き出てくる。その疑念は対象との齟齬であり、その齟齬と正対したときに自らの立場が明らかになる。私たちは自らの属性などの立場性によって社会認識が規定されており、その限定された視野を疑念によって自覚する。そしてその自らの立場性を廃棄つまり「自己否定」することで社会認識を深めることができるのだ。このように社会科において「自己否定」は大きな役割を果たす。

「自覚的自己否定的思考」においては「自己否定」を重視する。自分の知の体系を自覚的に否定することで、より深い社会認識へと自己を導くのだ。そしてそれは段階的に現れると考えた。自己と相いれないものの衝突は友人間でも起こるが、ある種同質と考えられる。私たちの認識や考えは社会環境によって大きく左右され、友人との意見の違いも、同じ社会システムを共有している点では同質なのだ。この「横の異質性」に留まるのではなく、社会システムそのものに対して疑念をもてるような「縦の異質性」を伴い、かつその社会への問いを考える「わたし」にも疑念を投げかける批判的思考が「自覚的自己否定思考」である。このような思考によってこそ社会がよくわかるということにつながるのではないだろうか。